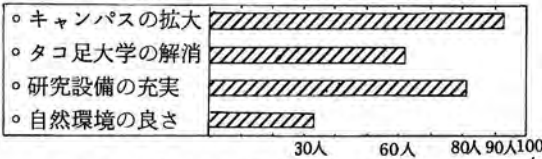


Q2 総合科学部の西条移転年を知っていますか。  
はい 10%  
いいえ 90%

正しく1984年、又は、昭和59年と答えた人は、わずか10%である。これは、学生に対する情報量の欠如に原因があるのではないか。

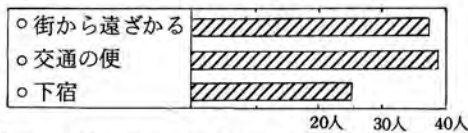
総合科学部で、移転についての説明会が開かれたことはない。私達は、移転についての情報を公式のものとして、学内通信から得ることができる。だが、その内容、量ともに、私達の関心を満足させるものではない。

Q3 統合移転によるプラス面は何だと思いますか。



キャンパスの拡大に、多くの人が期待している。裏返せば、現キャンパス（特に千田）の学生過密状態が、耐えられないことから、切実な要求となっている。又、現在5ヶ所に分散しているキャンパスが、医・（歯）学部を除いて一ヶ所に集まる為、各学部間の交流が盛んとなり、真の総合大学にふさわしいものになるという声も多い。

Q4 統合移転によるマイナス面は何だと思いますか。



主なものは上の3つである。広島市から遠ざかるため、映画、演劇、美術館など文化面での不満、娯楽施設が無いことへの不満がある。下宿、交通の便、

アルバイトが無いなど切実な問題も出されている。上・下水道の問題、移転期の混乱などの不安とともに、移転によって学生管理が強まるのではないかと、意見が少数ではあるが出されていることに注目したい。

Q5 統合移転に関する要望・意見について

移転に関する資料・情報をもっと学生に知らせてほしいという意見がほとんどである。又当局ペースで進められている「移転」作業に対し、学生の参加をいう声も多い。具体的要求として、学年、コースごとの研究室、談話室がほしいというのがある。

○アンケートを終えて、

来年夏の工学部の移転を皮切りに、広大統合移転はいよいよ目前に迫ってきた。総合科学部も、計画通りに進行すれば59年には、移転する。

現状の問題点は、情報量の絶対的不足である。Q2でもあげたが、学内通信だけでは、とても十分であるとは言えない。しかもここ数年、学内通信の、移転に関する記述が減少傾向にあるというのも不思議なことだ。もう一点、学生参加の窓口の欠如があげられる。現在、改革一移転に関して、学生の参加できる機関は、生活環境委員会（生環）のみである。この生環にしても諮問機関であり、出した答申に対する実行責任はないなどの問題がある。

今僕らが緊急に行わなければならないのは、身近かなところ一各研究室単位、学年単位一で団結し、要求を出していくことである。その第一歩に、情報不足解消のため、学校当局に説明会を開くよう呼びかけてはどうだろう。

“ 私は言いたい ”

## 「総合科学部と私事」

環境科学研究科・2年 今井知之

I. はじめに

残り少ない、言わば生きた化石の様な、環境科学コース一期生として、私のようなものが筆を取る事を非常に光栄に思います。（もう1人の生きた化石は偶然にも化石を研究しておく。）

II 認識まで

私の入学直後から現在に到るまで、総合科学部は多くのマスコミの題材となりました。1年生の頃は、その様な記事を読むに付け、自分の学部に対する認識不足を感じながらも、私は多くの時間を学部外活

動に費やしました。当時の一番の思い出は、イプセンの「人形の家」の英語劇でノラの夫役を演じた事です。長い台詞の突然の代役で、修道大学のホスキン先生も「こりゃちょっと難しい」と言われましたが、昔から舞台に立つ事が好きでしたから、最愛の妻に逃げられる惨めな夫役を一生懸命演じました。

さて2年生になると、同じコースの中にも既に自分のやりたい事を決め、古前先生などのお世話で勉強会を開いている学生もいました。私は彼等が羨ましく、自分も早く専攻を決めねばならないと考え、

多くの先生方に御相談しました。その頃から我が学部に対するマスコミの記事には、一方の側のエゴ的発言の様な、学部の現段階の評価としては本質的でないものがあるという気がしてきました。従って学生である我々がもっとしっかりせねばいかんという認識を持つようになりました。

### Ⅲ 専門

先生方の授業が上手だったのでしょうか、高校時代及第点ぎりぎりでも物理嫌いの私が、授業内容も良く理解でき、高校の物理の先生が成る程こういう事を言われていたのかと認識を新たにさせられることがたびたびありました。その後も物理系の授業を多く取るようになり物理を専攻しようという気になりました。一旦そう決めた後でも、勉強する事柄も多くやめたい気持ちになったり、また折から環境科学についての議論が高まり、私も先生方に不満などを言いました。しかし物理の先生方の親身になった熱心な相談や指導、学問に対する真摯な態度、また如何なる問題が起きても根本に戻り問題を解決する自信等に深く共鳴致し、よっしゃ先生の仰る通りに勉強してみようと決心しました。こうして、4年になり松原先生のもとで卒論指導を受けました。物理系の卒論は1年間勉強して身についた事のまとめを論文にするという主旨で、実験的理論的にも基礎的・原理的な事から書き、その中に少しオリジナルなものを織り込むという形式が採られる様です。

### Ⅳ 大学院

指導教官の松原先生は、「マスターが総合科学部の完成教育だ」と言われます。また、「一生のうちで大学院の2年間程、じっくりと自分の意志で勉強できる貴重な時間はない」と話されます。長い歴史の物理学を修得するには、知らねばならぬ基礎が非常に多くあります。その勉強を第一に、大学院2年間を使えと言うのが先生の教育方針です。よく実験の歩りが遅い事を口にしますと、先生は「実験とは準備に時間がかかり失敗の連続の様なものである」と、阪大の伊達宗行先生の「泣きが入らねばオリジナルなものはない」という口癖以上の慰めの言葉をかけ、問題点を適確に指摘して下さいました。

そういう事の繰り返しの中で、何とかデータを出し先生方の助言のもと、昨年春・秋の学会で発表させて頂いた事は、学問的ばかりでなく、色々な意味で貴重な経験となりました。

### Ⅴ 就職

新しい学部で知名度が低いために大々的なPRが必要です。学生も総合科学とはいえ、何か一つ専門をしっかりと勉強せねばいけません。といますのも、企業側は学生の成績証明書を見た場合、盛り沢山の修得科目や目新しい名の科目名に当惑し、何を勉強したのかと疑問に思い、企業の安全面から考え、従来の学部の学生を採用するかもしれないのです。私の場合、先生方の御尽力で地方の時代に先駆けて、少なからず専攻に関係ある、広島を代表する企業に入れましたことは大変幸せに思います。

### Ⅵ 将来の展望

これからの総合科学部の評価の決め手は二つあると思います。第一に、学生の意識です。「広大二十五年史」を見ると世界的研究を行っている方々が載っていますが、その中に現在、我が学部の教官の名が多く見つかります。創設以来多くの有名な先生方も当学部へ赴任されました。他大学に優るとも劣らぬ教授陣であるという意識を学生は持つべきです。教育面でも、一般教育から受け持っている為、学生教育に非常に熱心で、全ての教官が学生の成長を楽しみにしておられます。気力さえあれば、先生方が自然にその学生の良さを十分に引き出されるでしょう。先生の指導を通じ、研究を少しでも進歩させようというくらいの心構えが必要です。

第二に、卒業生の実社会での役割です。卒業生がどの様な所に行き、どの程度の成績をあげているかは直接の評価となります。私も世界の総合科学部松原研の最初の弟子としての誇りを持ち、社会人として頑張るつもりです。これからも機会あるごとに、先生方とコンタクトし御指導御鞭撻を賜りたいと思います。

最後に、総合科学部の益々の発展を祈りまして、筆を置きたいと思います。

## 「個人的意見」

環境科学研究科・2年 岩田尚文

我が学部の学問分野は、多種多様にわたっています。しかし、ごく普通の人間であるからには、やはり、その中の一つ分野を深く学ぶのが自然な状態

です。いくら、我が学部の方針が広い分野を学ぶことであっても、やはり、深く学ぶべき専門分野は一つにしぼるべきです。その他の分野は好い加減で良

いのです。(但し、おざなりという意味ではなく、適度という意味です。)我が学部は一学部一学科でありながら、学生は各自、色々様々な専門分野で勉強しています。これは素晴らしいことだと思います。自分の専門分野以外の知識に関しては、その分野を専門として学んでいる同朋に接して話をきけば、容易に得ることができるのです。加えて、同朋から気軽にきいた言葉というものは、教官から教わったものより、深く心に残るものです。このコミュニケーションこそ我が学部の最もすぐれた特徴です。それなのに、各人の進むべきコースが決まると、途端に研究室も分かれて、各コースごとにまとまってしまう。その結果として、我が学部の特色であるコミュニケーションの場が、極端に狭められてしまう。そして、各コースが孤立してしまうのです。研究室が一つであれば、(頭数が多いのだから広いスペースが必要だが)そこに居るだけで色々な知識が得られるであろうに、残念なことです。たとえ研究室が別々であっても、各室が近隣にまとまっていればまだ救われるのですが、各室はあちこちに散らばってしまっている。これでは、一学部一学科という特徴が全く生かされていない。

大学における我が学部の位置に関しても、疑問を感じます。我が学部は、本当に一つの学部として認められているのであろうか。我々は、他学部生の教養過程の講義の合い間に講義を受けているのです。この現実には、我が学部の起源に問題があるとわかってはいるのですが……。所詮、他学部にとって、我が学部は、第二～学部というふうにしかならず、受けとめられていないのではないのでしょうか。我が学部が大学の一つの学部である以上、大学としての調和が必要で、これがうまくなされなければ、各学部間がうまくいく訳がないのです。それなのに、学部内においても、調和がとれていない様です。我が学部は広い分野を扱っているだけに、種々様々な分野の

教官がいっぱいいます。その方々が、うまくまとまっていたら良いのですが、どうもそうではないらしく、学部内でさえ、うまく統一されていない様なのです。この様に、内外状況ともに不安定では、我が学部の将来は非常に危ぶまれます。やはり、一つの学部として、こんなにも多種多様な分野を扱おうとすることに無理があるのではないのでしょうか。

一般に大学院に進もうという方は、自分の研究したい専門を持っています。そして、その専門をより深めて、最終的には他の分野を専門としている同朋と共同研究を行い、少しでも新しい分野の研究を行おうというのが、我が大学院の方針だと思うのです。そして、我が大学院であれば、それができるはずだと思ったのですが、私にはそれだけの力がありませんでした。大学院で勉強するからには、徹底的に自分の専門の研究をやるべきです。自分の専門以外の分野は適度にこなしておいて、カリキュラムを気にせず、とにかく自分の専門に徹するべきです。そして、ある程度自信がついてから、自分に合うパートナーを他の分野から探してくるのです。そして、お互いにはない知恵をしばりあって、共同研究を行う訳です。そうすれば、新しい分野の研究ができるのではないのでしょうか。そもそも、何もかも自分一人の力で成し遂げようというのが誤りなのです。少なくとも、我が大学院であればこの様なことが可能だと思うのです。ただ、今のカリキュラムにそってこれを成し遂げることは、なかなか難しいことです。

以上、一期生(聞こえは良いが、実験材料に過ぎない)として過ごしてきた、私の誰にも話したことのない個人的意見を思いつくままに述べてみました。

君の頭が二つに割れて、脳みそが電子頭脳と入れ替わるとき、僕は君に鋼鉄のハチマキをプレゼントしよう。残念だけど、僕はまだロボットにはなりたくない。

## 「4年間を終えて」

環境科学コース・4年 土江 健雄

51年4月、入学した時は大学がどういうものかわからず、しかも、親から離れて生活することも初めての経験だったので、不安でいっぱいだった。その自分が、今、卒業しようとしている。なんと4年間ははやかったことか。これから少しづつ思い出し

ながら、4年間をふりかえてみようと思う。

総合科学部3期生として入学したが、まだ新しい学部であるだけに、その実態がよくわからず、不安だらけであった。まず就職している学部生がでていないことにあった。その次に、4コースもあって、

どのコースに進んでよいものか気にかかっていた。明らかに、コース選択によって、就職できる範囲がある程度狭くなっていく。自分は、大学1年まで進路を決めあげていただけに、コース選択には神経を使った。それというのも、コースによって必修単位があり、自分の進みたいコースに自由に進めないからだ。特に環境科学コースは1年での必修単位が多く、時間割の約半分は必修単位であったようだ。今、思うと、高校の延長であったような気がする。必修単位の中には、なるほど必要だと思える単位もあったが、専門単位に入れてもいいのではないかといいものもあった。自分は生物系に進んだからかもしれないが、物理・化学系の単位は、一応取ったというだけの感じがしてしょうがない。もっと一般の必修単位に幅をもたせて選択できるようにしてほしいと思う。

1年生で、一応、環境科学へ進めるだけの単位をとったので、自分の進みたい環境科学コースに進むことができた。2年生になると、専門の単位がふえてきて、やっとやる気がでてきた。特に生物系の授業が増え、その授業は一度も休まなかった。どんどん生物の基礎知識を増やしていこうと意気込んでいた。一方、教職の単位を必死に取っていった。理科の教師の資格を目指せばそれほど苦労もなかったと思う。が、数学の教師の資格を取ろうとしたので、人と違うことをして偏屈な奴だと思われていたにちがいない。教師になることはやめにしたが、数学の単位をとって後悔はしていない。一つの挑戦ではなかったかと思う。

3年生になると、数学の授業がほとんどであった。が、自分なりに生物系の勉強も少しづつであったがやった。この時期は、教師になろうと決意していたので、後期の中間ぐらいから就職の勉強に手をつけ始めた。就職の勉強を始めるには適当な時期であったような気がする。早く始めるにこしたことはないが、何事も適期があるように思う。4年生になってからは、卒論とか、教育実習とかで何かと忙しく、間にあわないことはいうまでもない。就職の勉強は、自分の経験からしか言うことはできないが、3年生の後期からぼつぼつ始めたらよいのではないだろうか。4年間でも、この3年生に入ってから4年生前期まで、勉強に関して一番充実していたようだ。

4年生になると、先ず卒論であった。が、前期は

何かと忙しく計画だけに終わってしまった。それというのも、教育実習、就職試験と、6月から8月の終わりまで続いたからだ。教育実習では、初めて“先生”と呼ばれ、何かとすぐたい感じだった。いつも教えられる立場にある自分がこの時だけは教える立場にまわった。教えること、理解させることの難しさを肌で感じた。4年間で最も印象に残る事の一つである。一方、就職は内定までこぎつけたので、後期は、卒論一本にしぼれた。9月、10月、11月と調査に行き、原稿を書く準備は12月、1月中に論文を書きあげるといように順調に進んでいった。集中してやっただけに、思っていたよりも良い結果が得られたように思う。これからは、卒論の提出、発表会の準備と忙しくなりそうだ。

4年間で絶対忘れられないことがある。硬式野球部に入り、4年生までやり通したことである。1年生の時は無我夢中で、先輩についていくのがやっとだった。夏の合宿は、盆なしで3週間、ハードスケジュールの連続だった。苦しいことばかりで、何でもこんな部に入ったのか、いっそやめてしまおうかとも思った。そのうちに2年生になると、レギュラーに一応なれたので、続けてみようという気になった。初の公式試合で、初めて自分のところへ来た球をエラーしてしまったことは忘れられない。レギュラーを確保していただくの力がなく、一シーズンで補欠になってしまった。ここで、一大転機がおとずれた。投手に転向し、特にリリーフ専門としてがんばった。シーズンごとに成績が上がり、3年生の秋のシーズンには、優勝という最高の栄冠に輝いた。しかし、全国大会に出場すること、特に神宮球場のマウンドで一度でいいから投げたいという夢は遂にかなわなかった。

最後に、この4年間は自分にとってかけがえのないものになると思う。学生生活の総括であり、社会へ出るための掛け橋となった。これからは、一人の人間として、責任をもって仕事をしなければならなくなる。学生時代のような甘えた考え、態度ではやっていけなくなるだろう。それだけに、仕事にもやりがいが出てくるだろう。後輩の皆さんもいずれ就職することになる。それまでの残り少ない時間を、有意義に過ごしてほしいと思う。悔いの残らないように。

## 「4年間をふり返って」

情報行動科学コース・4年 藤野常信

4年間をふりかえってといっても、すでにふり返るとそこにはなにもないわけで、なにもないことをなにもない書くほどのこともなく、なにかをこじつけるほどのこともない。しかしないということばは、おもしろいことばであって、実は無いという意味ではない。なんにもないところは、神だなにでもまつて、ホトケサンの前で手をあわせるように、しずかにその前にすわってジョヤの鐘の音をきけば、ありがたくて、なみだ流るる思いとはいかないまでも、神社のなんもない白砂の上を、あしあとなどを一つつつ歩いて、月などみると、自分のあまりにも日本的すぎる情緒にいやみなひとことをいいたくなった。人とはすべてずた袋であるならば、入口と出口についてだけかたればいいのではないかと思ったりする。大学に入る前は、当然高校生で、無事に浪人にならずにすんだのだから幸運といえようである。高校末期の自分とはいえば、かなりカタクナであって、オサカナのように冷たい水、涼しい水へとおよいでいった。昔から、どういうわけか井上靖のファンであり、井上流の大学生活をおくろうとしたのであった。井上流におくろうとするならば、1・2年は、なんもせずに、ゴロンとすごせば良いものを、生まれが、オオサカのイナカなものでそうもならず、なにやらむやみやたらと真剣にすごしてしまった。それでも、1回生のときは、1セメで20数単位というのを、1セメを1年間と思いがいしたおかげで、ずいぶんひまでであった。日に1度の授業のために、呉くんだりからやってきたのである。呉くんだりに住んだ理由というのが、涙がちょちょぎれるほどのバカバカしさ。聞くも泣の物語り。僕は呉とは、大阪でいうならば堺ぐらいたと思っていてアナロジーとして、まあ30分もあればと思ったし、10分単位で列車がくると思っていた。このあまさかげんは、呉の人ならわかるであろう。1年のあいだは、こんなぐあいだ、やたらひなたぼっこしていた記憶がある。友人のマツオカやヒロユキのはなしによると、授業時間中のボクは、異様にまじめで、ひとりではなれて、最前列でしきりとノートをとるという人種であり、気持ち悪かったという話を聞いて、変な気分になった。井上靖の作品のなかでも、特に自伝

が好きで、その主人公の洪作に自分を擬そうという努力をしてきたところがあった。洪作は、因果にも、柔道のみをやったということなんで、しかたないから買ったばかりのスノーピーのハンカチではなくて、がらにもなくそういった真剣クラブにはいったこともあったが、すぐに馬脚がでてしまった。そんなこともあり、1年の前期の前期あたりは、多少忙がしかった。だからよけいにひまを感じた。編集氏は、各コースの人に書いてもらうから、そのコースの学生としての4年間を書いてほしいとおっしゃった。だから、コース決定した理由を書く必要がある。当時、情報は、希望者が多くて困ったらしい。別にどこでもよかったのだが、心理学なんてのがおもしろそうだったんでそうした。昔読んだSFの中で、総合科学者が、心理学についてなに言ってたのを憶えていて、総合科学＝心理学の連想があったのかも知れない。以上が、理由なのであるが、書いてみて無意味なのでいやになった。情報には、群が3つあり、それぞれぜんぜん別のことをやっていて、ボクのやったことは、Ⅲ群でのことである。2年になると必修として実験があった。実験のメンバーのほとんどをそのとき知らなかった。前期がすんで半分くらい憶えた。それ以前は、現実の人間に対する興味などなく、ひたすら洪作ちゃんと遊んでいた。できるかぎり大阪にかえり、高校のときの友人や中学の友人と遊んでいた。それ以前は、whoを発しなかった。それ以後は、やたらめったらwhoを連発した。3年になろうとしたとき、こんどはⅢ群希望者が多くて困ったらしい。1人1人教官連の前によばれて、要するに「Ⅲ群にくるな」といわれた。実は、そのとき教官の顔を半分も知らなかった。見知らぬ人が、ブスとした顔で「やめろ。」という。反抗心でなにやらもっともらしい理由をつけた。3年になってもⅢ群の内に見知らぬ人が居た。3年になると卒論の予行演習の実験があった。友人にヒサノという男がいるのだが、彼は留年するのでちょっと記念にふれておく。留年記念というのも変なものである。ヒサノという男は、日本一周自動車無銭旅行に行っている。後輩諸君、おもしろいやつなんでたまには遊んでやってほしい。女性の方は、たまには、エサをや